

# イデックスオイルレポート ~For a week~

2023/9/1作成 (株)新出光

## 【概況】<米国でのハリケーン及び火災被害からの供給不安～原油在庫の予想を上回る取り崩し>

●25日、石油輸出国機構(OPEC)加盟・非加盟の産油国で構成する「OPECプラス」は、世界の石油市場の安定化を確保するため、現行の協調減産を当面維持する見通し。主導役のサウジアラビアは日量100万バレルの自主減産を9月も継続すると表明。さらに一部のアナリストは、サウジが10月も自主減産を延長すると予想している。需給逼迫への警戒感が根強く、原油買いが先行し相場は79.83ドルへ続伸しました。

●28日、米国立ハリケーンセンター(NHC)によると、熱帯低気圧「イダリア」は28日中に、キューバ西部付近でハリケーンに発達する見込みで、30日には米南部フロリダ州に上陸するとみられている。これを受けて、メキシコ湾沿岸の石油・ガス生産施設に影響が及ぶとのリスク警戒感が台頭。供給混乱への恐れから原油買いが優勢となり相場は80.10ドルへ続伸しました。

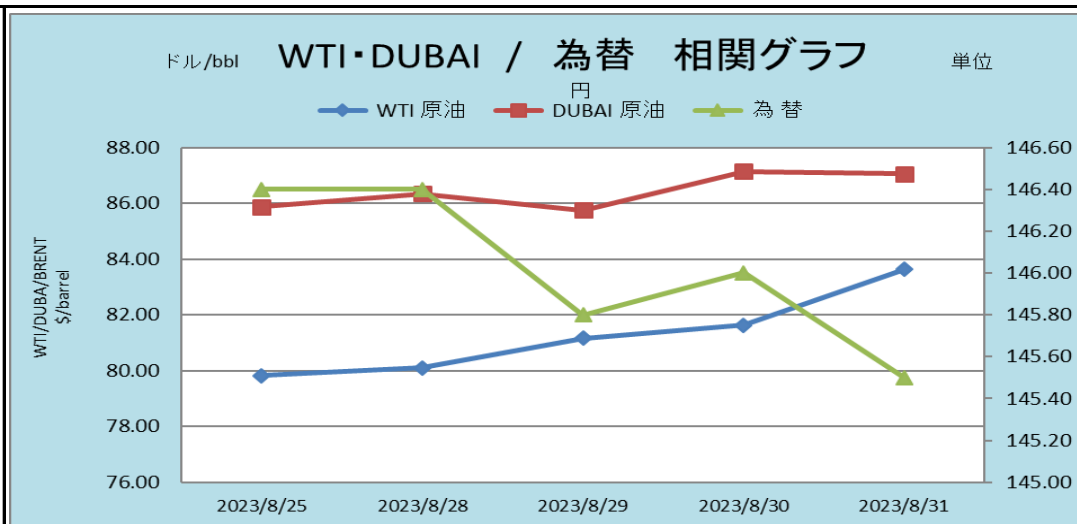
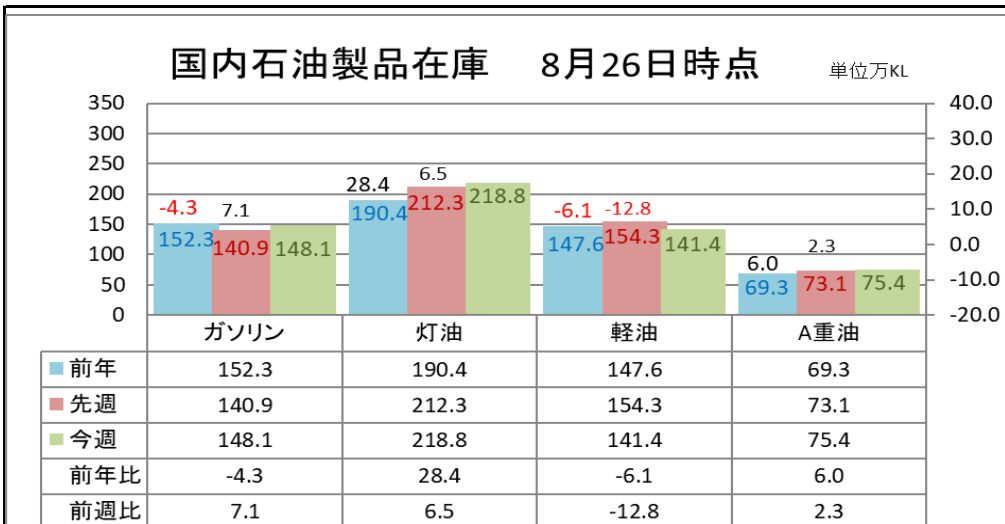
●29日、米国立ハリケーンセンター(NHC)によると、熱帯暴風雨「イダリア」は29日早朝にハリケーンに発達し、フロリダ州に向けて北上中。翌30日の上陸に備え、米メキシコ湾沿岸の石油・ガス生産施設では作業員を退避させる動きも出ている。先週にはルイジアナ州にある米国内3番目の規模の製油所で火災が発生しており、悪天候が供給混乱に拍車をかけるとの警戒感から、相場は81.16ドルへ続伸しました。

●30日、イダリアは30日に南部フロリダ州に上陸。メキシコ湾には石油精製施設が集積しており、供給不安が高まった。また、外国為替市場では対ユーロでドル売りが優勢の展開。ドル建てで取引される商品の割安感につながり、原油が買われ相場は81.63ドルへ続伸しました。また、米エネルギー情報局(EIA)が発表した週間石油在庫統計では、原油在庫が前週比1060万バレル減と、取り崩し幅は市場予想(ロイター通信拡大版調査)の330万バレル減を大きく上回った。一方、ガソリン在庫は20万バレル減との事です。

●31日、前日公表された米週間原油在庫が予想を大きく上回る取り崩しとなったほか、石油輸出国機構(OPEC)加盟国とロシアなど非加盟産油国で構成する「OPECプラス」が協調減産方針を維持するとの見通しが示されたことを背景に需給逼迫懸念が広がり、相場は83.63ドルへ続伸しました。

一方、ロイター通信がこの日公表した調査によると、OPECの8月の産油量が日量2756万バレルと、前月から同22万バレル増加した。主要産油国による現行の減産措置に加え、OPEC盟主のサウジアラビアが10月以降も日量100万バレルの自主減産を延長するとみられているにもかかわらず、OPECの産油量が増加したとの報を受け、相場は中盤に上げ幅を縮小する場面もありました。

9月1日 | 16:00現在 | WTI原油 | 83.83ドル | 為替 1ドル | 146.73円



	次回元売変動予測	
	9/7~	元売変動予測
ガソリン	→	-4.9~-5.4
灯油	→	-4.9~-5.4
軽油	→	-4.9~-5.4
A重油	→	-4.9~-5.4
LSA	→	-4.9~-5.4

### 【製品卸価格】

《今週》今週の元売り仕切り改定は、3社ともに原油コストはOSP込みで「±0円」、補助金は、「-9.7円・30%」、都合「+0.3円」の値上げ改定となりました。資源エネルギー庁の公表する全国レギュラーガソリンの28日時点の小売価格平均は185.6円となっております。

《9月2日以降》次回の元売り改定は、原油コストは、「+1.0円~+1.5円」、激変緩和補助金は「-16.1円・30%」の見込みで、都合「▲4.9~▲5.4円」の改定の予測となっております。

※原油コスト「+1.0~+1.5円」  
 ※激変緩和補助金「-16.1円」前週比-6.4円  
 ※現時点での予測です。

### 【次世代エネルギー】<トヨタ九州小倉工場、太陽光+水素で全量自前再生エネへ>

トヨタ自動車九州(福岡県宮若市)は小倉工場(北九州市)で、消費電力のすべてを太陽光と水素という再生可能エネルギーと蓄電池で賄う仕組みを9月から順次つくる。事業所の消費電力量を予測し、太陽光発電装置と燃料電池での発電量を適切に制御するシステムを活用。小倉の「全量自前再生エネのマザー工場化」をめざす。

全体の消費電力量は5000~6000キロワット時(kWh)程度。9月からは工場内を走るフォークリフトのような運搬車両の充電や一部照明の電力消費(10kWh)を太陽光発電(10kWh)、蓄電池(14kWh)、燃料電池(35kWh)で賄う。発電と消費の予測や発電量を制御するシステムは、スタートアップのアーケルテクノロジー(福岡市)が開発した。急な曇天や降雨などで発電量が急激に変化した場合も必要な電力を賄えるよう、同システムが燃料電池から電力供給するよう指示。天気などによって発電量が変動する太陽光発電の不利な点を燃料電池や蓄電池で補って、最小限にとどめる。化石燃料由来でないことを示す「非化石証書」を購入すれば、実質的に全電力を再生エネで賄っているとみなされる方法もあるが、トヨタ九州はリアルな再生エネで小倉工場の全電力を賄うことにこだわる。

【出典】 日経電子版 : <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOJC140YL0U3A810C2000000/>